

生物の辞典

編 著

法政大学教授・理 博	柘 植 秀 臣
農林省水産研究所・理博	谷 田 専 治
東北大学教授・理 博	永 野 為 武

岩 崎 書 店

500815

生物の辞典

¥1,500

1956年10月20日 印刷

1956年10月25日 発行

編著者 柘 植 秀 臣
谷 田 專 治
永 野 為 武

発行者 岩 崎 徹 太

印刷所 株式会社 厚徳社
松本印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町1-65

編集部・東京(29)3121-4

営業部・小石川(92)8095

振替・東京96822

岩崎書店



国際遺伝学会に出陳されたキンギョ

白 浜 の 熱 帯 植 物 の 花



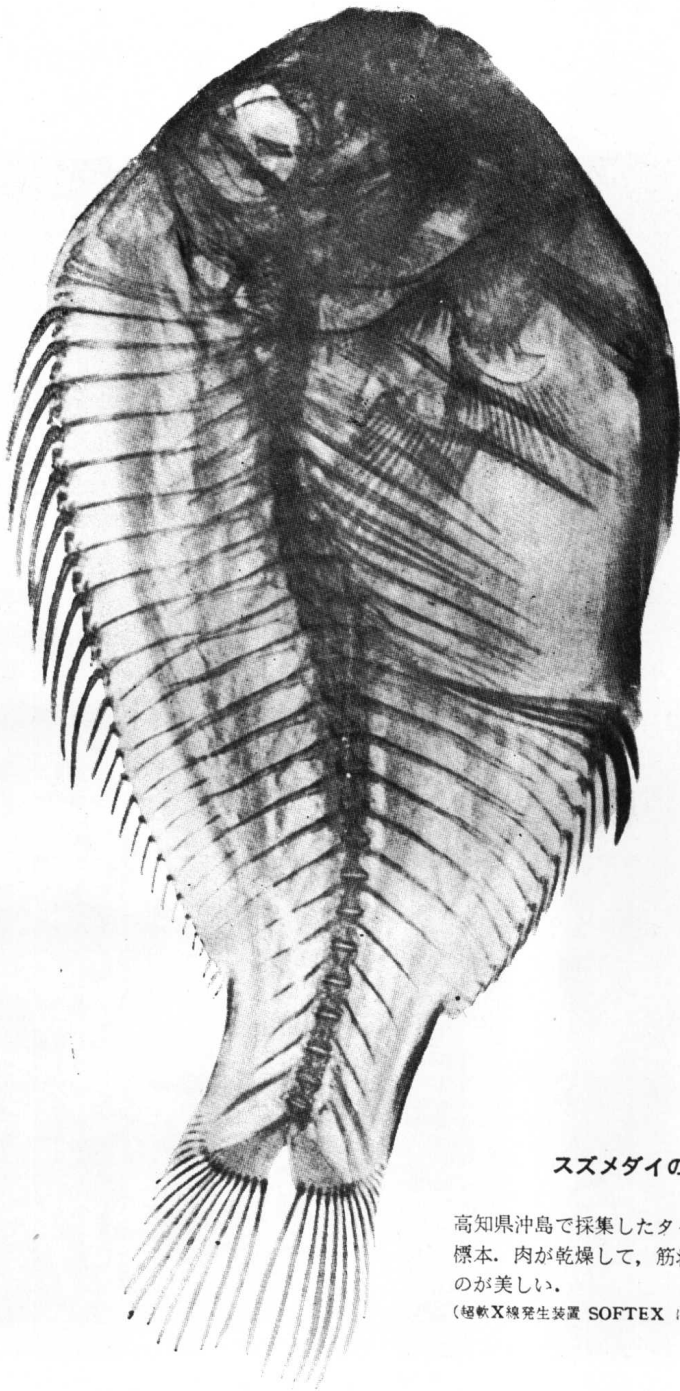
インドハマユウ



アロエ



バナナの花



スズメダイの透視像

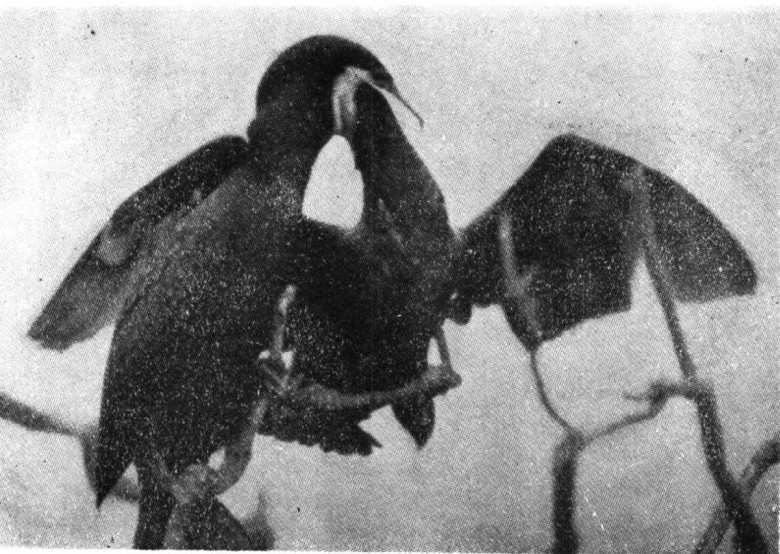
高知県沖島で採集したタイの乾燥
標本。肉が乾燥して、筋状化した
のが美しい。

(超軟X線発生装置 SOFTEX により撮影)

カワウの生態

カワウの一家、右がわの2羽が雛らしい、雌は2回目の産卵準備らしく巣の中にいる。

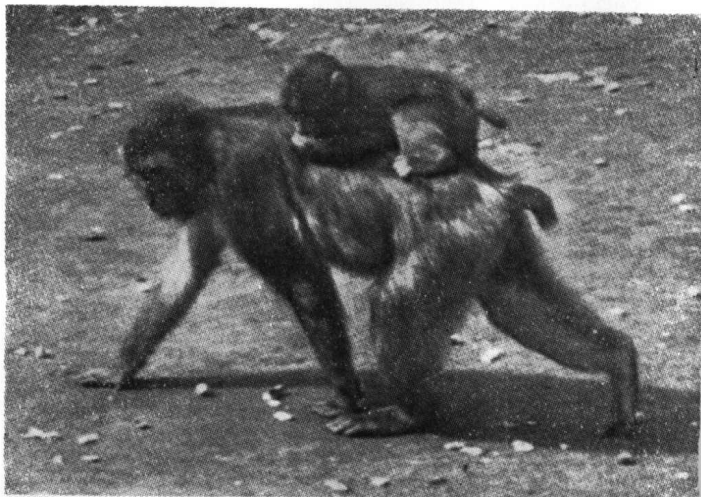




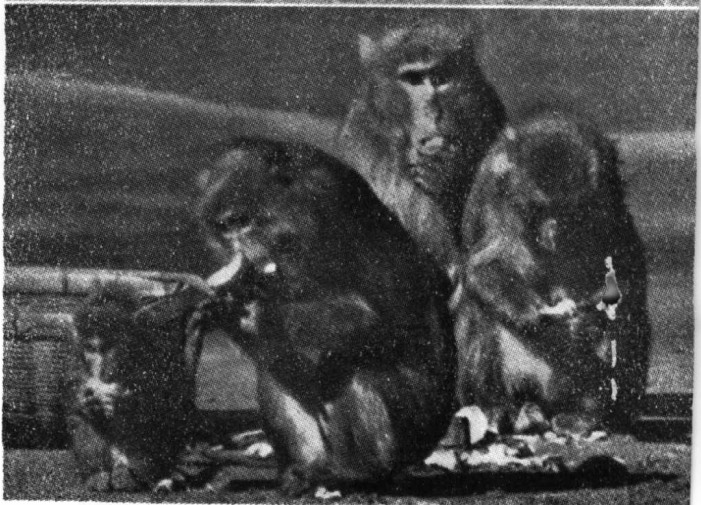
ウの特長をよくあらわした一コマ。雌は翼で平均をとりながら親の口中にある餌を食べている。親鳥の後頭が、雌鳥のクチバシの先でつき出ているのに注意。

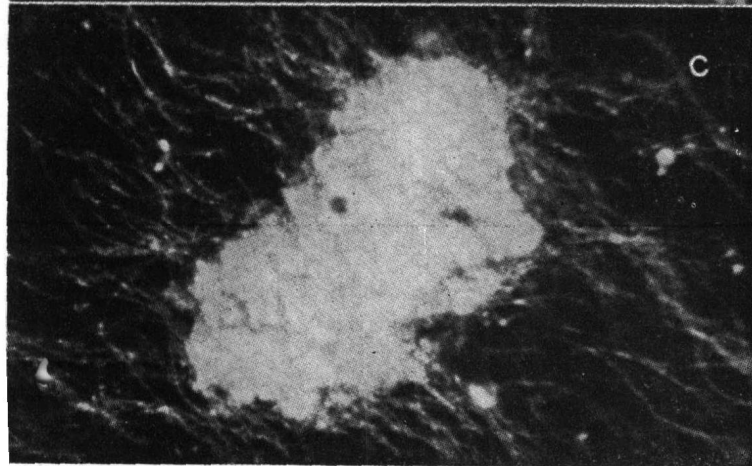
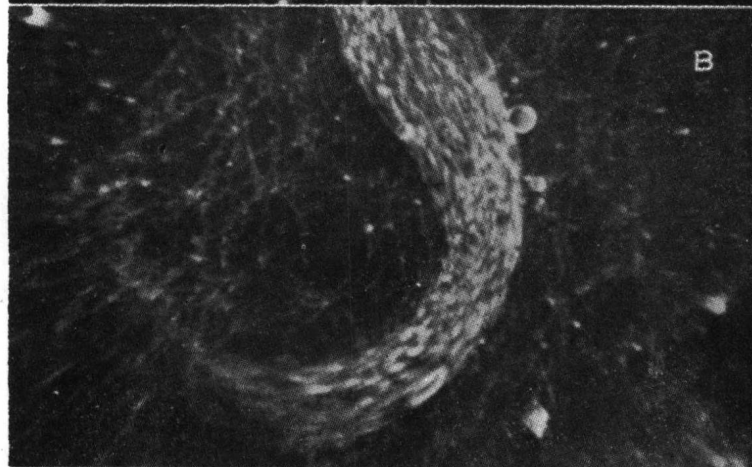
ニホンザルの生態

サルの赤ん坊を背おって歩く母サル。



サルの一家。楽しそうな一家団らんの様子。

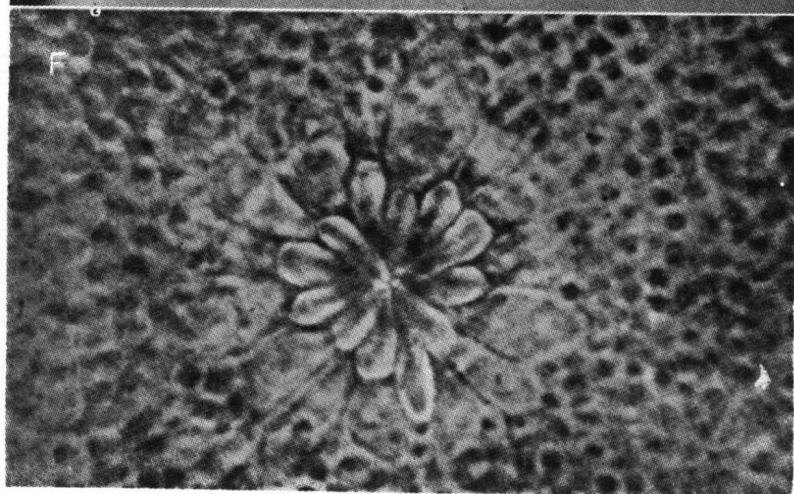
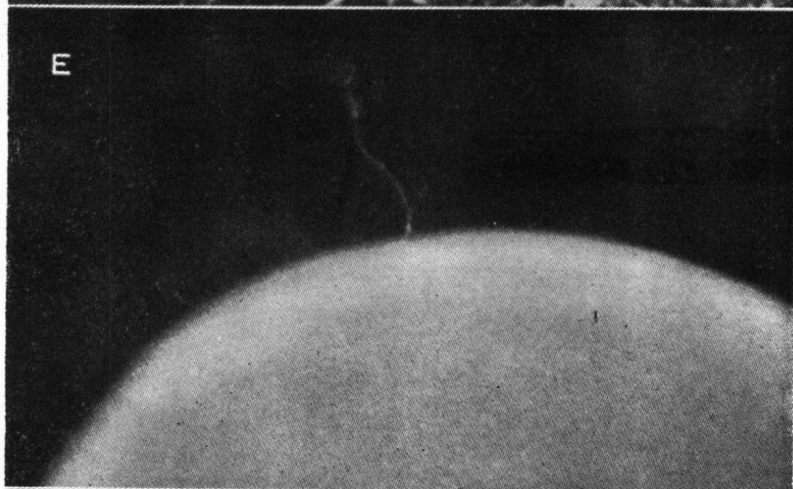
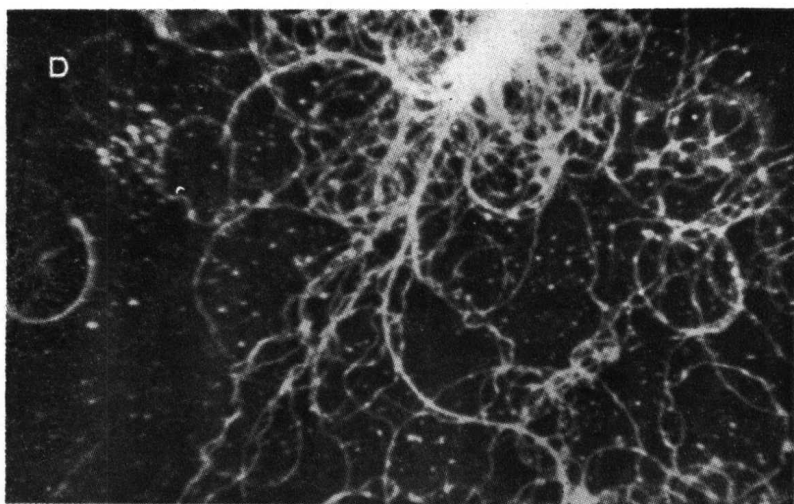




A 雄の腹の中には
精巣が1対あって、
その中心には精子が
束になって一ぱいつ
まっている。この束
は250個くらいの精
子が集ってできてい
る。

B, C, D 交尾して
いるうちに、精子は
雌に移される。する
と精子は活潑に動き
はじめ、束をはぐし
て一定の管を通して
卵巣に近づく。

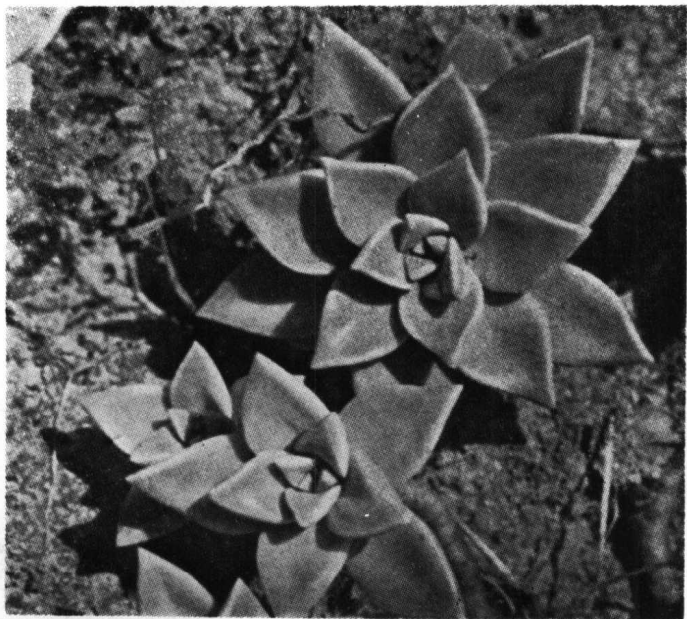
の受精



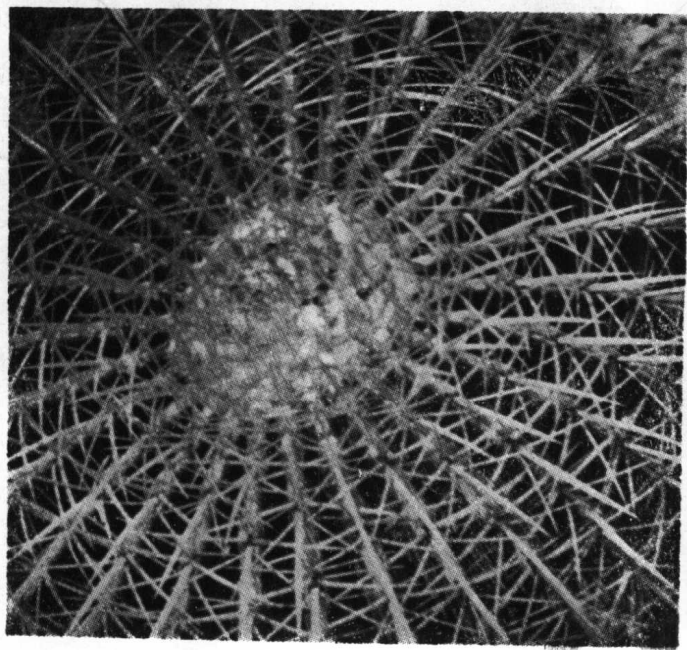
E やがて交尾が終り、雌が卵をうみはじめると、精子は卵に近づき、卵門から侵入する。

F 卵門を上から見たところ、菊の花のような中心に小さい孔がある。この孔から精子が入っていく。

MAC57/05



メキシコ産
“エケペリア・カルニコロール”



和名「金鯢」
“エキノカクタス・グルソニ”

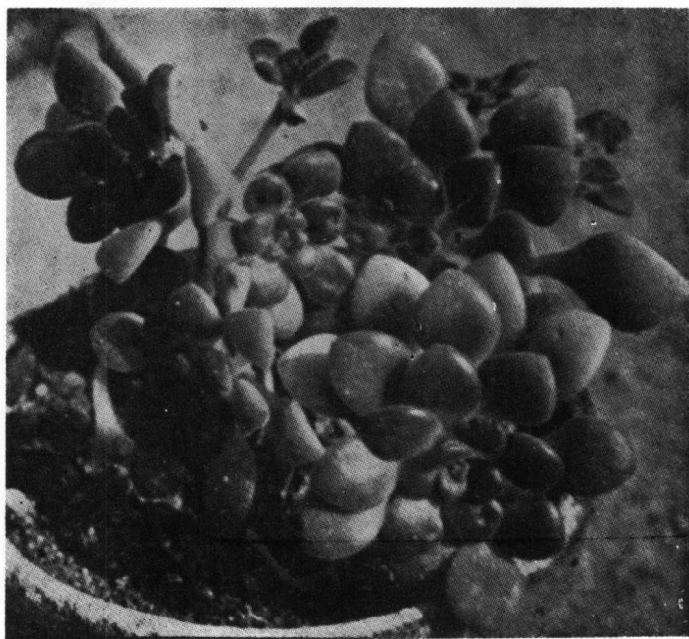
葉 の デ ザ イ ン

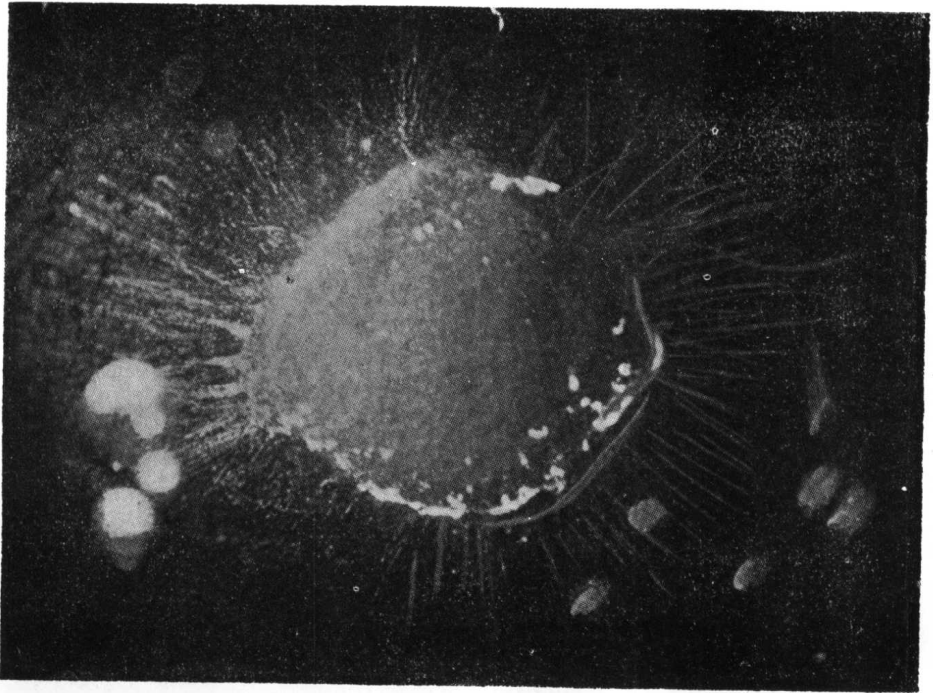
瀬戸内海に浮ぶ小豆島の八代田植物園には世界中から集められた植物が妍をきそっている。その中から、自然が織りなす芸術、葉のデザインをひろってみた。



鋸歯のバンクシアとよばれる
"バンクシア・セラータ"

バラの花のような "アエオニウム・リンドレ"





生きている脳細胞

10時間培養した脳の一片，暗視野装置で観察すると，写真のように放射状に神経繊維が発育しているのがわかる。



72時間以上，培養したオリゴデンドログリア（膠質細胞の一種）。細胞内にはたくさんの顆粒があって，はっきりと流動している。細胞の一方に片よって透明に見える部分は細胞核で，核の位置は運動の方向をしめている。

（慶應大学医学部 提供）

は し が き

現代生物学の進歩は、実にめざましい。生物学の分科も、つぎつぎにうまれている。個々の発見や精密な研究の成果は、日ごとにつみ重ねられている。生物学ほど、めまぐるしく発展する学問もないといってよいであろう。それでこの時代に、短時日のあいだに辞典を編集することは、たいへんむずかしいことであり、厳密にいうと、むしろ辞典をつくることそれ自体が無理なことのように思われる。すなわち、原稿をしたため、それを整理し配列して、活字をひろっているうちに、新しい項目を入れていかねばならなかったり、学説も更新されるといったぐあいである。

しかし、今日のように複雑多様になっている生物学の知識を、最も簡便にとりいれるとか、漠然とした記憶を正すには、やはり辞典にまさるものは他にないであろう。しかも、割合に中型で、あらゆる生物学の分科にわたって各種の項目を整備している生物学の辞典は、わが国には乏しいのである。

わたしたち三人が1940年にだした富山房辞典叢書の1巻であった『生物学辞典』ついで1950年に同じく三人でだした岩崎書店の『最新生物学辞典』（これは翌年に増補版に改められた）は、幸にも意外に多くの方々によって活用されてきた。だが、それからすでに6年の歳月が流れ、しかも加速度的に発達しつつある生物学の現状よりみると、まことに古びた存在といわねばならなくなった。そのため、わたしたち三人は、三たび勇気をふるい、知識を集めて、ここに新しく編集し『生物の辞典』と名づけて世におくことにした。

生物学に関連した事項はもちろん、多くの図版を入れて説明をおぎない、できるだけ簡略な記述と最新の成果をとりいれるように努めたつもりである。動植物の個々の名称についての項目ははぶいたが、それでも全体としては、約1万項目を採録することができた。それは、生物学の辞典としては、いまだ少なすぎるといふくらいはあるかもしれないが、中型辞典として広い対象を考えての精選した結果と考えていただきたい。

広い対象というのは、生物学の専門家ばかりでなく、新制大学学生・高等学校・中学校の生徒諸君をはじめ、一般には教師・教養人・読書人・生物を対象とする技術者・農学、水産学、医学など生物学の応用科学に関連ある人々、さらには文化科学の研究者らのことで、こうした方々に十分活用していただけるものとして編述したつもりである。

項目を狭い紙面でできるだけ多く採用するために、さきにも述べたように説明は簡略をむねとした。そのため、当用漢字以外の漢字も使ったものも多い。それに術語の統一も、まだ学界として完成されていないし、古い用語を使用した関係書や文献もあることだから、ある場合には、むしろ、むずかしい字体をそのまま意識的に残したのものもある。

この辞典の編著にあたっては、内外の辞典・教科書・参考書・専門書・専門雑誌から項目および図版を選びだした。そうした書籍や雑誌、また説明のために引用した図版箇所などについて、一つ一つその出所を明らかにするのが当然の義務であり礼儀であるが、中型辞典の性格上、省略させていただいた。原著者にたいして、ここに厚く感謝の意を表したい。

本文の不備をおぎない、また別の利用の仕方によっては、きっと重宝されると考えて、目次にかえて、生物学に用いられる記号・略号・難読動植物名表(字画引き)・難読事項索引(五十音順)を用意しておいた。また巻末には生物分類表・植物分類表・動物分類表・地質年代表・生理的溶液・培養液・脊椎動物に寄生する主要原虫・生物学史年表、などを付録とした。また、専門家には最も活用される「欧文索引」は、単に項目のところにでてくる原語ばかりでなく説明の文中にもでてくる原語を網羅しておいた。さらに巻中の写真版は図版とともに、この辞典に、いくらかでも生命を与えることに役立てたいとの意向でとり入れたものである。貴重な原図を使用させてくださった諸先生、ならびに科学朝日編集部のご厚意にたいしても、ここに深謝してやまない。

最後に、このようなめんどろな辞典の出版を引受けられた岩崎書店主と、幾回かの組換や校正の労をいとわれなかった岩崎書店の編集氏にたいしても謝意をおしまないところである。また、この辞典のために、とくに推薦の辞をたまわった岡田要博士(日本動物学会会頭・日本学士院会員・東京大学名誉教授)・篠達喜人博士(国際基督教大学教授・前東京大学教授)・丘英通博士(東京教育大学教授)・藤永元作博士(水産庁調査研究部長)の諸氏にたいし、厚くお礼を申上げる次第である。

1956 年 9 月

	柘	植	秀	臣
編 著 者	谷	田	専	治
	永	野	為	武

凡 例

1. この辞典は、ひろく生物学一般の各分科にわたる事項を項目として選んであるが、分類学にかんした項目は特殊なものをのぞいて、科または目以上の生物群を標準とした。
2. 一般項目としては、これまで出版された内外の辞典・教科書・参考書・専門書から、ひろく選びだしてあるが、なるべく確定性のあるもの、一般性のあるものを主とした。しかし最近の、著しい生物学の進歩にも多くの注意をはらった。
3. 人名の項目中、著名な外国人については現存のものも集録したが、日本人は故人に限った。
4. 項目の排列は五十音順・発音式とした。現代かなづかいを用い、漢字はそれに応じて当用漢字を使用した。全部を完全に当用漢字で統一することは困難であるため、生物名・術語は漢字を用いた。それで、難読動植物名表と難読事項音訓表を用意した。
5. 見出しは原則として、すべてゴシック体平かなを用いた。しかし、定訳のない術語が慣用されている外来語・外国人名などは、ゴシック体片かなとし、外来語をふくんだ項目は両者混合のゴシック体をつかった。
6. 平かな見出しのつぎに和文見出しをおき、つぎに欧文の見出しをおいた。欧文見出しは、原則として英語であるが、ときにドイツ語やフランス語も入れた。ドイツ語の場合は(独)、フランス語の場合は(仏)とした。
7. 同一の発音の項目が、2項目以上あるときには、平かな見出しのつぎに、①②……と区別をつけた。
8. 外国人名は、かなよみの姓を見出とした。生歿の年は(1820—1887)のようにし、現存者は(1901—)の表現をとった。
9. 本文中の数字はできるだけローマ数字(1, 2, 3, ……)を用い、度量衡はC. G. S. 単位の略号を用いた。
10. 欧文見出しのすぐつぎの()に入れた用語は、見出しと同義語を意味するものである。
11. 同義語は原則としては1項目としたが、説明はもっとも一般的な項でおこない、そのほかは＝で説明をはぶいてあるから、後項でひきなおしていただきたい。
12. 本文中でも、外国語をつけた方が理解に都合のよいものは、できるだけ入れ、巻末の欧文索引には、これらを採録してある。

13. 本文の説明は、できるだけ簡明にするようにしたため、漢字の使用が多くなっている。わが国ではまた、術語の統一が徹底されておらず、まだ新旧とりまぜた用語が各所にみられるので旧來の用語もそのまま用いてあるものが多い。
14. —→××は、××の項をみよ、の意である。
15. *××は、××の項を参照されたい、の意である。
16. 学名（属・種名）は、すべてイタリック体でしめしてある。
17. ‘1~5室’ とあるのは、1 ないし 5 室の意である。
18. 生物学に用いられる記号・略号・生物分類表・植物分類表・動物分類表・地質年代表・生物学史年表などが付録としてのせてある。
19. 欧文索引は、生物に関連する欧文書（とくに英書）を調べる場合を考慮して、生物字引のつもりで利用していただきたい。
20. 本文中の数字の使い方については、純粹の日本語として扱われるものは和字を用い、数えうるものはローマ数字とした。

記 号 ・ 略 号

記 号		略 号	
+	①プラス, 加えるの記号; 存在する ②正 positive ③雄 ④より多い	⊙	2 年性植物
-	①マイナス, 減じるの記号; 存在しない. ②負 negative ③雌 ④より少ない ⑤一重結合の腕 プラス・マイナス; 正または負; 不定; 多少.	⊗	多年性植物
±	①かける ②交雑 crossing ③倍率	♂	雄
×	①かける ②一重結合の腕	♀	雌
·	割る	♂	単 性
÷	①割る ②すなわち ③比 ④二重結合の腕	♀	雌雄同体; 両性
:	割る. 例: $\frac{1}{2} = \frac{1}{2}$	♀	雌雄同体
/	割る. 例: $\frac{1}{2} = 1 + 2$	⋮	歯式; 例: ヒト $\frac{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}$ または $i \frac{2}{2} c \frac{1}{1} p \frac{2}{2} m \frac{3}{3}$
=	①等しい ②二重結合の腕 ③同義 ほぼ等しい		
≡	①より大 ②結合の腕		
>	①より小 ②結合の腕		
<	パーセント; 100分の1		
%	可逆反応		
↔	パーミル; 1000分の1, 0.1%		
‰	デルタ; ①拡散係数 ②氷点降下度		
△	①四角形 ②雄		
□	ベンゼン核; ベンゾール核		
○	①小カッコ ②花式では器官が合着していること		
()	角または温度の度		
°	角または時間の分		
′	角または時間の秒		
″	右旋性〔d〕		
d	左旋性〔l〕		
l	花式における対称面の多数あるときの記号		
⊕	①一年生植物; 通常は一巡植物		
⊙	①一年生植物		
①	②二年生植物		
②			